
 巻頭言

発想の転換

坂井 利之†



現代はすべての意味で限界を感じるようになったために、発想の転換を全面的に求められている。コンピュータという機械の増加の限界は、ハードウェアのサポートシステムとしてのソフトウェアの開発能力（実はこれの逆転した発想が次代のコンピュータとも言うべき）と共に、将来全人口のどの位の比率の人がこの分野に入ってくるかにもよるだろう。

一方、コンピュータの導入の経験のある人は、「コンピュータのシステムの決定などは極めて易しい。コンピュータの扱うデータや情報の供給源となる分野、コンピュータを使用し、その結果を利用する分野の人人の協力を得ることが最も難しい問題である」と口を揃えて言う。

一つの企業、一つの組織体で解決しようとする情報のシステムはすでに開発されてしまっていて、後は他の企業、国家公共団体、国際的な規約などによって制限されたり、あるいはどのように改正され運営されてゆくかの動向をつかみとる必要がある。

各種の法律は何れの国でも旧態依然とした状況にありながら、コンピュータ時代にふさわしいコンセンサスが得られていない。

郵便、電話、電報、ラジオ、映画、蓄音器、書物、雑誌、新聞といった分類ですべて慣習的にも実際的にもかたがついてしまった時代から、相互にコンピュータを介して情報形態の変換ができる時代に入っているのに、それに適応した状態に入れない。

人間のプライバシー、情報（アイデア）の存在、使用、管理のむづかしさ、など人間個人、社会組織の根底的な問題をなげかけるのが情報である。情報化時代とはこのような混沌から始まるのである。

アメリカではこの問題を根本的に調べるため、数年前から政府関係機関で委員会を発足させたが、結論には到達していない。

工業化時代、物に中心をおいた時代から心や情報に

価値を認める時代になってきたとき、われわれの日本は果してアメリカやヨーロッパに比して優位にあると言えるだろうか。

追いつくべき師匠、真似るべき物が存在しているときの実績はわれわれ自身でさえ驚異の眼をみはるものが日本にはあった。しかしわれわれの身近かのコンピュータの点に関して考えても、ソフトウェア、ランゲージ、ついで OS という思想、TSS、データ通信、コンピュータネットワークなど、そのどれについても果して哲学的思索やプロジェクトの決断があったであろうか。

アメリカにおけるこの方面の実務家、研究者、経営者は私的な発言とはいえ、あまりにも日本のソフトウェアに対する考え方のあまさとそれに価値を認めないこと、ならびに発想とか思想の貧困さには驚いているのである。最初は単にアメリカの3大戦略企業、つまり航空機、原子力、コンピュータの一つとしてのコンピュータの売込み位に考えないこともなかったが、日本に数回きた人、日本人とよく接している人、初めて日本を訪問した若い研究者でも率直に驚きの言葉をはくのである。

われわれ学校で教育にたずさわっている者も、教育が、政治、行政と共に日本の最も遅れている一つであるという指摘を知らないわけではない。コンピュータでも覚えられる知識のつめ込み、人間らしい活用のできない知識をもった人間、狭くとじこもって、必要ならばどんなことでもしてやろうとする開拓者精神のない人間をあまりにも多く教育する結果になっていなかっただろうかと反省するにやぶさかでない。心のかよった教育が幼児の言語獲得にも重要なファクターであると言う。ハーバード大学のエッティンジャー教授は過去10年のテレビ教育の失敗は、生とカンヅメの差を知らなかった所にあるという。

コンピュータ技術、情報産業の面における欧米とのギャップはここに来て急激に広がるような気がするが、単なる杞憂であれば幸いである。

 † 京都大学工学部、本学会理事